セイレーンの涙

見えない愛につながれて

ティファニー・ライス
藤峰みちか　訳

試し読み版
【ソルン編】

STORY

息をのむほどの美しさと淫らな作風で人気になり、
何不自由ない暮らしをしているエロティカ作家のノーラ。
そんな彼女にも悩みがあった。
これまで普通の恋をしたことがないのだ。
歪んだ欲望のことなら15歳のときからよく知っているけれど、
どうやったら愛し合ってしあわせになれるの……？
そんなとき、ハンサムな敏腕編集者ザックがノーラの新しい担当者として現れて……。

魅力的なキャラクターたちが繰り広げる、それぞれの愛と欲望の形——

ノーラ：
エロティカ作家。
心に闇を抱えている。

彼女の才能を開花させる
年上の男

ザック：
ノーラの新しい担当編集者。
堅物で口が悪いが敏腕。
ノーラに惹かれる。

〈ザック編〉を試し読み

すべてを教えてくれた
昔の恋人

ソルン：
謎の多い人物。
ノーラの初めての恋人。

〈ソルン編〉を試し読み

無垢な体を捧げようとする
年下の学生

ウェスリー：
ノーラの同居人。
19歳の大学生。ノーラに
一途な想いを寄せている。

〈ウェスリー編〉を試し読み

彼女
ボタンを削除した
データを打ち直しますでしょうか？

一時間後、ノーラはホテルを出て自分の車に向かった。道々小声でソルンに悪態をつく。一秒でも怒りの手綱をゆるめれば泣き崩れてしまうだろう。最後に口をきいてから何カ月もたっていた。あらゆることをして彼を避けていた。ときどきクラブで彼を見かけるが、空間をはさんでお互いを見るだけだ。居合わせた人は微妙に何歩か下がる。ふたりのガンマンのあいだに偶然はさまれた住民のように。けれどもソルンは今日は攻撃的ではなかった。それより悪かった。彼は話をしたがった。
ノーラは頭の中で彼との会話を反芻した。相変わらずかなり一方的だ。ノーラは外泊した問題児のようにベッドに座り、ふかふかのカーペットに足をすりつけていた。彼はノーラの前に立ち、彼女のさまざまな罪をひとつひとつあげつらった。ノーラは十五のときから彼を知っている。十八年のあいだに備蓄できる弾薬の量には驚くばかりだ。
終わり近くになって、ソルンはわざわざこんな機会を設けた理由を明らかにした。キングズリーが告げ口したのだ――ノーラが最近変わったふるまいをしている、口数が少なく、怒りっぽくなり、熱心に仕事をしたがる日もあれば、乗り気ではない日もあると。ノーラは、新しい本の書き直しで手いっぱいなのだと説明した。今度の編集者は石頭で、一生に一度のチャンスと困難を与えられていると。ソルンは疑っているようで、何か話していないことはないだろうなと言ってきた。彼がお金を払った時間がようやく終わり、ノーラは帰ろうとした。ドアから出るとき、ソルンが言った言葉で足が止まった。

「ウェスリー」

ノーラはゆっくりと振り返った。あたりさわりのない口調を心がけて尋ねた。

「彼がどうしたって？」

「今度会うときは、もっと話すことがありそうだ。わが小さき者よ」

彼が古い呼び名を使ったので、ノーラの心臓が縮んだ。でもその整った麗しい顔を見つめるだけにして、トイバッグを取り上げ、部屋を出た。自分の車の運転席に座り、目を閉じる。ソルンがふれてこなかったことに感謝の祈りをつぶやいた。前回の記念日にはそれが起こったのだ。その夜は、ソルンの家に遅れて着いた。ワインのグラスを受け取った。共通の友人の話をしたり、キッチンテーブルでチェスをしたりした――何度となくノーラを乱暴に犯したテーブルだ。数分のあいだ、ノーラは自分がもはや彼の所有物ではないことを忘れた。ビショップを動かそうとして、ひと筋の巻き毛が顔にかかった。ソルンが手を伸ばして耳にかけてくれた。彼は親指でノーラの頬をなでた。まもなくふたりは彼の寝室にいて、ノーラはベッドの柱に縛りつけられていた。その夜、あまりにも激しく叩かれ、ノーラは涙で窒息しそうになった。ソルンはようやく苦痛を与えるのをやめ、ノーラの縛めを解いた。ノーラは彼の腕の中に倒れこんだ。邪悪さの抜けきっ

たソルンは、ベッドにノーラを横たえてあまりにもやさしく愛してくれたので、ノーラはまた泣いた。その夜、彼はノーラの中で動きながら、デンマーク語で話した。彼の心が最も広く開いているときに使う言葉だ。“ヤイ・エルスカ・ダイ”はデンマーク語で“アイ・ラブ・ユー”を表す。その言葉を彼は何度も何度もノーラの肌にささやいた。
彼はノーラの中にとどまったあと、一緒に体を起こしてベッドの中央に座る姿勢をとった。ノーラの両脚は彼のウエストに巻きつき、両腕は肩にからんでいる。彼はノーラの首にキスをしながら、ノーラの傷ついた背中を両手で上下になでた。ノーラはゆっくりと腰を揺すり、久しぶりに自分の中にいる彼を味わった。

「おまえは首輪を恋しがっている」

ソルンは言った。質問ではなく、断言だ。ノーラは四年前に彼と別れるとき、一緒に自分の首輪を持ってきた。

「恋しいわ」

ノーラは首を傾け、自分の喉に彼が届きやすいようにした。ノーラはまた身をかがめ、傷のついた唇に彼のキスを受けた。

「私のところに戻ってきてもいいのだよ、エレノア。いつだって」

「無理よ」

ノーラは首を振った。

「彼らはあなたを必要としてる。私が必要とするよりも。あなたの人生を半分に引き裂くことはできない」

「それが私の人生だ。おまえは私から逃走した日に、私の人生を半分に引き裂いた」

「やめて」

ノーラは言った。目にじわりと涙が浮かぶ。胸を大きく上下させながら、爪を彼の肌に食いこませてしがみついた。

「逃走って言わないで。逃げたんじゃない。そうじゃないこと知ってるくせに。私が別れたくないと思ってたこと知ってるくせに。あなたから逃げるくらいなら、燃える建物に飛びこむわ」

ノーラの激しさに彼が笑った。

「逃走でなければなんなのだ？」

ソルンはノーラの額に唇を押し当てた。

「這い出したのよ」

ノーラは微笑もうとした。

「私は這いつくばるのが得意だから」

ソルンはさらに強くノーラを抱き締めた。ノーラは彼が自分をベッドに鎖でつなぎ、一生この場にいられるようにしてくれることを祈った。でもわかっている。夜明けに彼は私を帰すだろう。彼は私の意思に反して私を引き留めるようなことはしない。たとえ、私の意思に反することが、私のしたいことであっても。

「私のところに戻るときは――」

ソルンが言いかけ、ノーラは再び彼の目を見た。

「戻らないわ」

「もしも私のところに戻るならば」

彼は珍しく譲歩した。

「おまえは走るか。それとも這って進むか」

ノーラは全身を彼に押しつけた。たくましい肩に頭をもたせかけ、彼の筋肉質の背中に涙が川となって流れるのを見つめる。

「飛んでいくわ」

ソルンにとってその夜は、ノーラがいまだ彼のものである証拠だった。でもウェスリーにとっては、ノーラのみみず腫れやあざ、割れた唇、紫色の頬を見たときに、恐ろしい悪夢の夜となった。病院へ行く必要はないとウェスリーを説得するのにたっぷり一時間かかった。もっとひどかったこともあると話しても、彼は安心しないようだった。

「暴力じゃないの。愛なのよ。暗闇でないと現れない愛もあるの」

「ふざけたことを言わないで。あいつはノーラを打ちのめし、ノーラはあいつにそうさせた。もしこれが愛だというなら、あいつはもうノーラを愛するべきじゃない」

ウェスリーはそう言って玄関に向かった。着替えをつめたダッフルバッグを持ち、ギターのケースを斜めに背負って。

「そう願うわ。彼と私のために。そしてあなたのために」

ノーラの声の何かでウェスリーの気が変わった。彼はダッフルバッグを床に落とし、ギターを置いた。ノーラのところへ戻ると、おずおずと彼女に両腕をまわした。ノーラに痛い思いをさせないように細心の注意を払っている。ノーラは泣いた――自分が彼に引き起こしてしまった苦痛に。ウェスリーは一緒にノーラの寝室へ行き、シャツを脱ぐのを手伝ってくれた。ノーラがベッド

に腹這いになると、彼はあざを氷で冷やし、みみず腫れに抗生物質の軟膏を塗ってくれた。そのあいだはふたりとも口をきかなかった。でも、ノーラがようやく眠れるくらい楽になると、ウェスリーは自分の決断を伝えた――ノーラが仕事をするのを止めることはできないけれど、もしまたソルンのところに戻って、痛めつけられるのを許したら、僕はここを去る。ノーラにとっては、目をつぶって二度と開けるなと言われているようなものだが、ウェスリーのために同意した。

車を走らせて家に帰り、また普段着に着替えた。ソルンとの接触を、今後いっさい断つことに決めた。同じ集団で行き合うことを思えば、難しいのはわかっているが、なんとかしよう。ソルンとは二度と話をしない。私をだまして彼に会うよう仕向けたからには。

※こちらのファイルは【試し読み版】です。続きは書籍でお楽しみください。

【『セイレーンの涙』 公式サイトはこちらから】

http://www.harlequin.co.jp/campaign/erotica_sep.html

【電子書籍の購入はこちらから】

http://www.harlequin.co.jp/hq/books/detail.php?product_id=6217

セイレーンの涙【ソルン編】

http://p.booklog.jp/book/75691

◆

THE SIREN

by Tiffany Reisz

Copyright © 2012 by Tiffany Reisz

All rights reserved including the right of reproduction in whole or in part in any form. This edition is published by arrangement with Harlequin Enterprises Ⅱ B.V./ S.a.r.l.

®and TM are trademarks pwned and used by hte trademark owner and/or its licensee.

Trademarkes marked with ® are registered in Japan and in other countries.

All characters in this book are fictions.

Any resemblance to actual persons, living or dead, is purely coincidental.

Published by Harlequin K.K., Tokyo.

◆

＜セイレーンの涙＞ 公式サイト

http://www.harlequin.co.jp/campaign/erotica_sep.html

著者：（株）ハーレクイン

http://www.harlequin.co.jp/

ハーレクイン社　公式facebook

https://www.facebook.com/harlequin.jp

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）

運営会社：株式会社ブクログ